

ずいそう

“オレ流” 指導力

加藤 修 司



私は中日ドラゴンズの大ファンである。“ドラきち”と言って過言はない。何度か試みてみたが、地元広島カープのファンにはなれない。そんな私が敬愛してやまないのは、中日ドラゴンズ歴代監督のなかで、誰もが“名監督”と認めざるを得ない成績を残した“オレ流”落合博満前監督である。もちろん彼は選手としても素晴らしい成績を残しているが、彼の本当の才能は指導力にあるとわたしは思っている。落合前監督の8年間、中日ドラゴンズはただの一度もBクラスになっていない。そんな彼の吐き出す言葉は、ほかのスポーツ指導者の誰も持ちえない含蓄がある。あるスポーツコラムニストは、落合博満前監督の発言のいくつかを“ノストラダムスの四行詩のようだ”と例える。人を食ったような、意味深で、もってまわった、小憎らしい言い回し。しかしその言葉を紐解き、彼が導き出した結果と照らし合わせたとき、彼はその未来を見透かしていたかのように“それ”を具現化している。「最後をみてなさい」と吐き捨てる彼には、負け惜しみと強弁を現実のものにする“魔力”があるかのように思えてしまう。しかしそれは、落合監督時代の中日ドラゴンズが、12球団一の練習量をこなしていたからこそその強さであり、スーパースターのいない、いわば凡庸な選手たちを、奇抜なアイデアと巧みな話術で“12球団一の選手たち”に育て挙げた手腕は「みごと」の一言である。「オレの話をきけ」、「それ、できたぞ！」落合前監督のずば抜けた才能、それはまさに“オレ流”指導力である。

当社では毎年、若手社員を対象にして、施工管理技術検定試験の受験勉強会を行っている。講師は“オレ”である。中山間の小さな街にある当社の場合、たくさんの応募者の中から新入社員を選べるわけではない。大学や高専を回り、地元出身の若者たちに声をかけ、集まってくれた若者たちを技術検定試験の受験勉強という“グラウンド”で鍛える。授業は常に「クエスション、アンド、アンサー」、テキストはあくまで参考資料である。たとえばコンクリートの分野では、「生コンクリートはいったい何で出来ているのでしょうか?」と問う。彼らの答えは、「セメントです」、「石(粗骨材)です」、「砂(細骨材)です」、「水です」と続く。

「ほかに何がある?」と問うとみんな黙り込んでしまう。意地悪くみんなを見渡して、一息いれてこう答える「空気だ」。するとみんな目をまるくして、その体が前にせり出てくる感じが伝わる。「生コンクリートの材料が空気?」その疑問が彼らの興味をそそり、脳に刺激を与える。混和剤、耐凍害性、ワーカビリティ、コンシステンシーといった色々なキーワードが、興味とともに、彼らの脳にインプットされていく。単純にテキストを読んだだけでは、次週の勉強会ですでに忘れていく。スパイスは、ちょっとした奇策と話術による刺激だ。しかし、それだけでは“オレ流”指導力にはおよばない。現在、一級土木施工管理技術検定試験の合格率は約1割前後である。そのような状況にもかかわらず、土木技術者を目指す若者たちは、自分の使命も知らず、そして彼らにおとずれる未来もわからない。“オレ”は彼らの未来を予言する。「司法試験より合格率が低い資格試験だ。絶対にこの資格を取ろう! 未来の君たちは、地域社会にとって、貴重な存在だ!」と。彼らの顔が一瞬輝く。合格率は年にもよるが、約三人に一人。3割3分3厘。打者でいえば一流だ。ただ、建設系の学生が減少し、年々、若手社員が少なくなっていくのが残念でならない。

落合前監督はクールで、ニヒルな、理論家としてのイメージが強かった。試合中も常に無表情を装い、飄々として指揮にあたった。しかし、退任後のインタビューで、試合中に選手がミスをするとき「はらわたが煮えくり返るほど腹が立っていた」と答えている。そして、最後の指揮をふるった2011年の福岡ソフトバンクホークスとの日本シリーズは第7戦までもつれこんだ(実に第1戦に勝利した後、「勝負は第7戦だ」とインタビューに答えている)。惜しくも敗れ去った落合ドラゴンズの選手たちは、ロッカールームにひきあげて、落合前監督を囲み、監督とともに全員で号泣したという。激情家で涙もろい男。意外にも“オレ流”指導力の本質は、“情熱”と“人情”であるということだろうか。